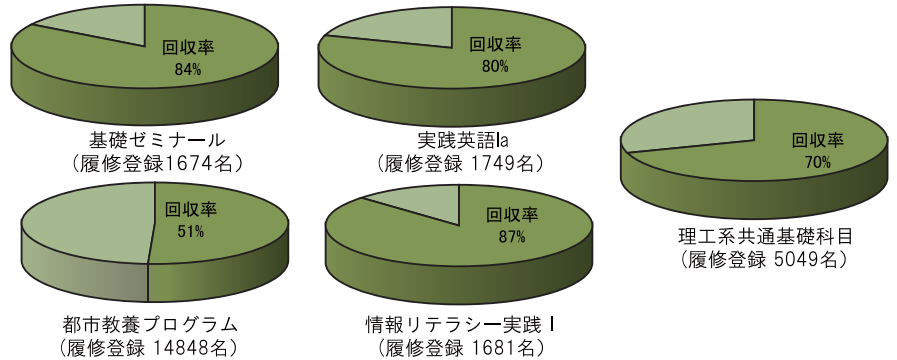


※結果の詳細はFD委員会ホームページに掲載しています。http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/

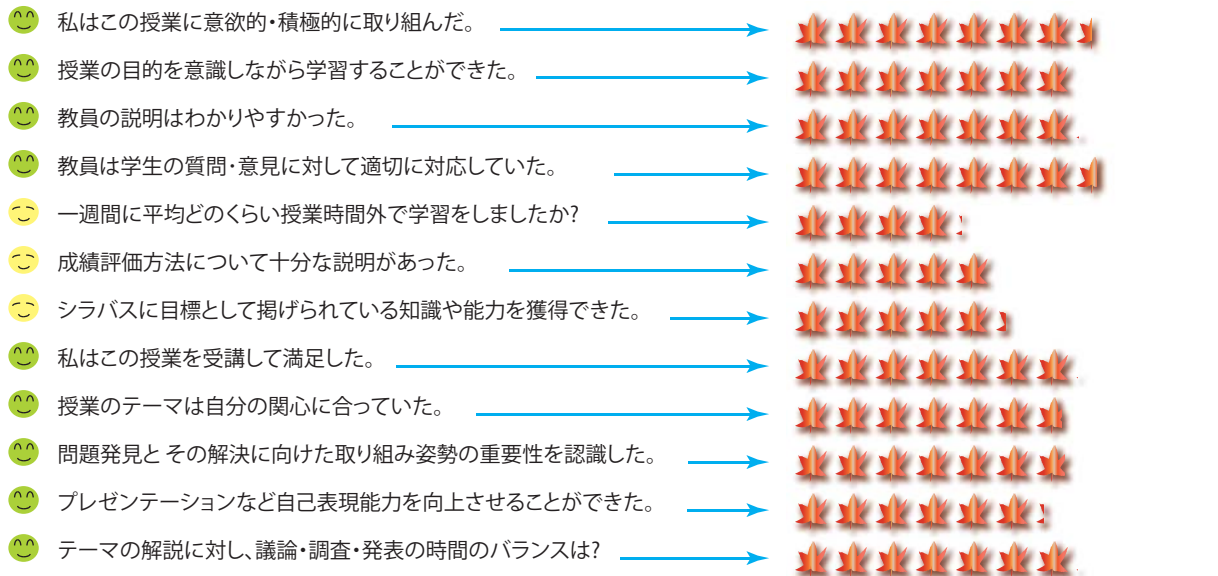
2010年度前期の全学共通科目の授業評価アンケート集計結果をお知らせします。アンケートの対象者数と回収率は右の円グラフのとおりです。今回も多くの学生の皆さんに回答いただきました。

**ご協力ありがとうございました!**



※ 調査結果は回答者個人が特定できないような形に処理した上で、FD委員会の責任で集計・周知されるとともに、授業担当者にフィードバックされます。  
 ※ アンケート結果内のグラフは“強くそう思う”および“そう思う”の回答割合を示しています。ただし“時間外学習時間”については“1時間以上”の回答割合を、“難易度”と基礎ゼミの“時間バランス”および都市教養プログラム・理工系共通基礎科目の“クラスサイズ”の設問については“ちょうどよい”の回答割合を示しています。なお、質問事項の一部は簡略化しているものがあります。

**基礎ゼミナール**



**こんな意見がありました**

- もう少し計画的に授業を進めてほしかった。
- グループワークと個人発表のバランスを考えてほしかった。
- フィールドワークが経験できてよかった。
- 他学部・系の学生との交流・意見交換ができてよかった。

**授業担当者から**

- 時間の制約があり、ディスカッションを十分にさせられなかった。
- 学生のモチベーションにバラつきが感じられた。
- 学生の自主性を引き出すように努力した
- 学生に、効果的なプレゼンテーションの仕方を指導した。

【担当部会からのコメント】「基礎ゼミがいちばん好き！」という声も多く、満足度も上昇し続けています。ただ、「自己表現能力」に関しては、学生と教員の評価に若干のズレあり。まだまだ改善の余地がありそうです。

**FD (ファカルティ・ディベロップメント) とは**

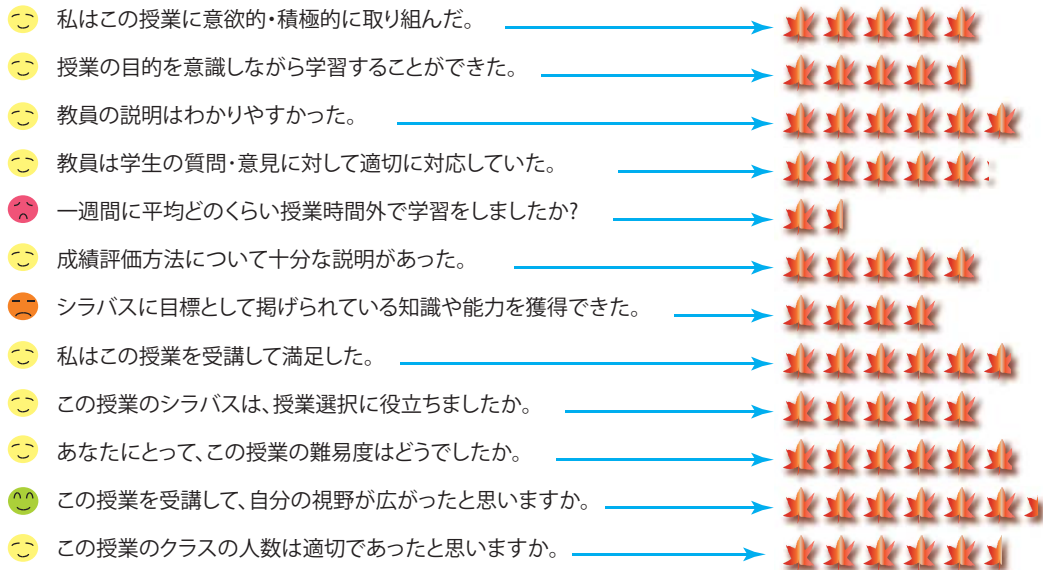
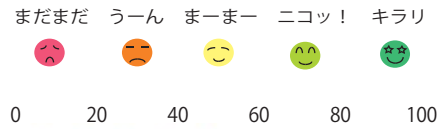
起源は、米国にあり、「大学の自己評価機能の開発、個人と組織の教育機能の開発、教員人事機能の適正化の実現、管理運営機能の開発」を含んだ大きな概念とされています。日本では「教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称」と定義されています。

**FD レポートの愛称「CROSSROAD」の由来**

CROSSROAD (クロスロード) とは、首都大学東京が4つの大学を再編・統合して設置された大学であるため、その「文化の交差点」を意味して命名しました。4つの大学の知的文化が交差すること、そこで出会って新たな教育が生み出されていくこと、それがこの名前のコンセプトです。



# 都市教養プログラム



## こんな意見がありました

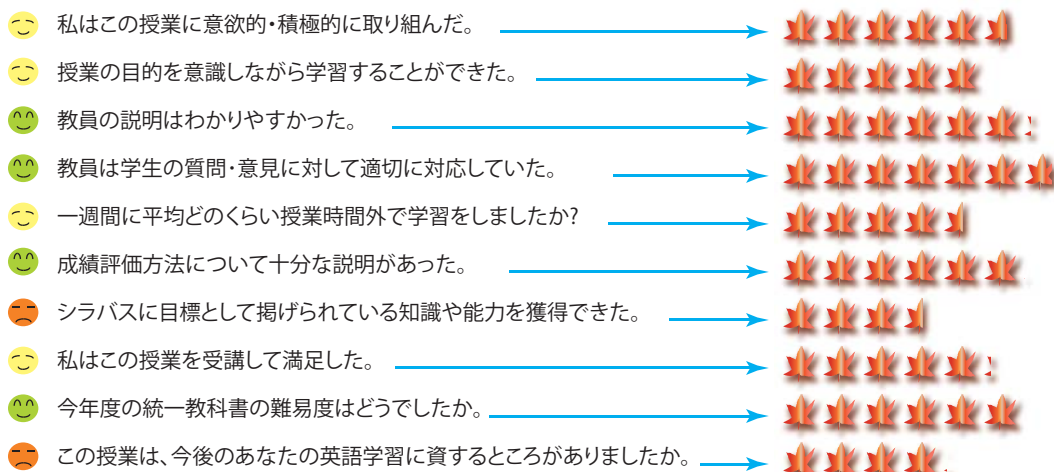
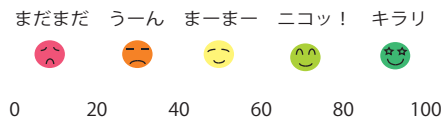
- 授業中の私語がうるさく、もっと注意してほしい。
- スライド（パワーポイント）の切り替えが速すぎてノートが取れなかった。
- 板書や説明をもう少し分かりやすく丁寧にしてほしい。
- レジュメがとても工夫されていて、授業内容が理解しやすかった。

## 授業担当者から

- 受講生の関心や態度の差が大きく、一部の学生が意欲ある学生に迷惑をかけていた。
- 講義への関心を高めるために、タイムリーな話題や動画を多く取り入れた。
- 昨年度の授業評価を受けて、内容を少し減らし、説明をゆっくりするように努めた。

【担当部会からのコメント】3人に2人が「視野が広がった」と感じていますので、専門外の内容であっても意欲的な姿勢を期待します。教室環境や教員との認識の差が大きいシラバスの内容等については改善に努めていきます。

# 実践英語 Ia



## こんな意見がありました

- 和訳だけでなく、実践的な能力が身につく授業にしてほしい。
- 教科書だけでなく、さらに難易度の高い英文が読みたかった。
- 発音練習・音読練習がためになった。
- 小テスト・単語テストを頻繁にしてくれたので力がついた。

## 授業担当者から

- 学習意欲の低い学生の興味を引き出すことに苦労した。
- 副教材を多く使い、学生の習熟度にあった授業を行った。
- 学生の理解度を確認しながら授業を進めた。
- 語彙力の定着のために、単語テストをこまめに行った。

【担当部会からのコメント】実践英語 I ab は、着実に成果をあげていると考えます。さらに検討を加え、充実した内容となるように改善に努めていきたいと思えます。

# 情報リテラシー実践 I



## こんな意見がありました

- 学生の理解にあわせた授業の進め方をしてほしい。
- プログラミングについて、もっと詳しく知りたかった。
- Word や Excel など、実践で役立つ基本的なスキルが身についた。
- 先生やチューターが丁寧にわかりやすく教えてくれた。

## 授業担当者から

- 習熟度別クラス編成の検討の余地があると感じた。
- 課題の採点項目を公開して、客観的な視点からの成績評価を行った。
- 学生の専門分野と関連する課題を出すように心がけた。

【担当部会からのコメント】情報リテラシーを身につけるには、学んだことの復習や、実践で使うことが重要です。習得した ICT 活用による問題解決手法を専門の授業などでの課題に適用し、リテラシーをさらに高めてください。

# 理工共通基礎科目



## こんな意見がありました

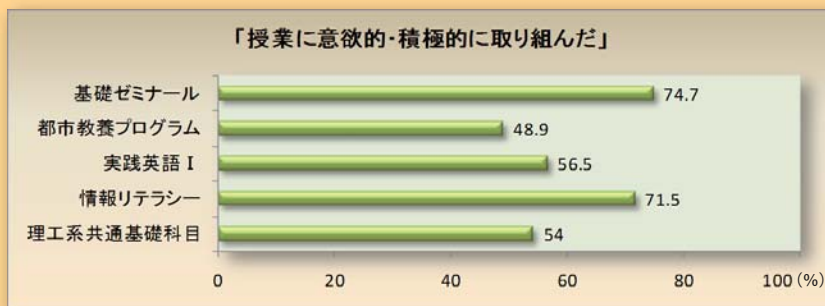
- 教科書を有効に利用してほしい。
- 板書の仕方を工夫してほしい。
- 演習が充実していて、知識が身についた。
- 説明・解説が丁寧にわかりやすかった。

## 授業担当者から

- 受講生が多すぎるため、一人ひとりに目が行き届かない。
- 学生の学力や意欲の格差に対応することに苦心した。
- 演習問題を多く課し、理解を深めさせるようにした。
- 中間テストや小テストを実施して、学生の学習時間を増やすようにした。

【担当部会からのコメント】過去 4 年間の結果を比較すると、1, 7, 8 番目の「意欲」「成果」「満足度」は、わずかながら増加を続けていますが、急速に増加していた「学習時間」が、初めて減少に転じてしまいました。

- 皆さんの「意欲的・積極的な授業への取り組み」が学習成果を高め、満足度も高くなると考えられます。この「態度」評価は「満足度」評価と同傾向を示していますし、意欲的・積極的でなければ「授業時間外学習」も進まないはずです。
- 平成 21 年度「学生の意識と行動に関する調査」（「知のキャリア形成支援委員会」）では、授業に対して意欲的に取り組んだと回答した人は 68.6% でした。平成 22 年度前期の全学共通科目の「態度」評価結果は基礎ゼミ約 75%、都市プロ約 49%、実践英語約 56%、情リテ約 72%、理工共通約 54%（グラフ参照）となっています。
- 基礎ゼミ、情リテ以外は前述の「学生の意識と行動に関する調査」の結果を下回っています。授業に対して意欲・積極性が高まらないのは、一体どうしてなのでしょう？ その原因を探らなくてはなりません。
- 「学生の意識と行動に関する調査」では「学習意欲を高める授業」として「将来役立つ実践的な知識や技能を身につける」約 65%、「学問の基礎を身につける」約 55%、「社会と学問の関わりや意義を知る」約 50%であり、実用性、学問基礎、社会との関わりが 3 大要素でした。「よく分かる授業」約 45%、「最先端の研究成果」約 35%、「グループワーク等協力」約 20%であり、学生の皆さんは基礎や実用性に関心があるようです。



## 首都大学東京では授業評価アンケート結果を基に様々な教育改善を行っています

本学では平成 17 年の開学以来、FD 委員会を中心に、授業評価アンケートの結果等を基に様々な教育改善に取り組んできました。その主な例をご紹介します。

- 基礎ゼミナールでは、学生ができるだけ第 1 希望の授業を受けられるように、過去数年のデータ分析をもとに、希望状況に即した曜日・時限別のクラス配置を行いました。
- 都市教養プログラムでは、受講生の多い科目に対して、授業補助員を配置しました。
- 実践英語では、新教材を開発し、22 年度より本格的に使用を開始しました。また、履修相談のためのオフィス・アワーの拡充を図りました。
- 情報科目では、e-ラーニングシステムを学生の学習支援や授業評価アンケートに活用しました。
- 理工系共通基礎科目では、科目による成績評価分布の偏りを少なくし、GPA の公平化をさらに進めました。
- 「授業担当者の手引き」に「シラバス作成のための参考資料」を掲載し、各回の授業内容や成績評価方法を明記するよう徹底しました。

## 「別冊クロスロード」（第 3 号）の編集を終えて

昨年度から刊行を始めた「別冊クロスロード」ですが、本号では質問項目解説シリーズ No.3 として「意欲的・積極的な取り組み」を取り上げました。アンケートの結果には、個々の教員・学生の取り組み方、授業科目の特色、受講人数や教室環境など多くの因子が反映されています。このレポートに掲載しているグラフは、5 つの授業科目群それぞれの中で平均されたものですので、授業科目群の特色を表しているとも言えます。FD 委員会では、この他にもさまざまな視点から問題を整理し、検討しています。アンケート結果を基に行った具体的な改善例は、毎号このページに掲載しています。改善には多くの方の協力が必要で、時間や予算を要するものもありますが、発端となるのは皆さんの声ですので、引き続きアンケートへの協力をお願いします。

FD 委員会広報部長 加藤 直（都市教養学部理工学系化学コース教授）